

はじめに

2月9日から22日までカンボジアとタイへの研修旅行をした。カンボジアへは日本バプテスト連盟主催のミッション・スタディー・ツアーで、タイは以前タイで伝道の働きに携わった杉山いずみ姉の計らいで行くことができた。カンボジアへは10名、タイへは西南学院の神学部を中心に6名で行動を共にした。

日常的な生活を離れて、海外での宣教の働きを学びに行くということはどのような意味があるのだろうか。とりわけタイやカンボジアは言葉の壁、食べ物や生活様式のあらゆる日本との違いがあるのだが、そのことを超えてスタディー・ツアーで見えるものは何かを考えさせられた。

1、カンボジアとタイの福音理解と教会の現状

日本との聖書に対する向き合い方に違いを知ることができた。カンボジアもタイも、ダイナミックに聖書のみことばを捉えている。「癒される」とあるならば、大胆に祈りもとめる。そして祈り求めたからこそ、癒されたという証がされている。日本のように医療が地方にもいき届いていないからこそ、神に熱心に祈り求める姿勢が強いのだと思わされる。

また、カンボジアの地方では CBU（カンボジアバプテスト連盟）の伝道チームの集会で一度に200から300人が救われている。人々が福音を求めていて、信じることに大きな抵抗がないのではと思う。しかし課題は、多くの方が救われていても、受け入れる教会が成熟していないため、信仰の継続が難しいということである。多くの教会が建てられ、多くの信仰者が現れている。これからはそれをしっかりと支える教会形成がなされることが課題として挙げられている。

2、宣教師の働きの深さ

カンボジアでは日本人の宣教師とインドのナガランド出身の宣教師の働きを見させていただいた。それぞれの働きはとても興味深く、宣教師の働きの重要性を思わされた。

日本人宣教師の働きは、現地の牧師や教会スタッフに対するケアであった。カンボジアでは、神学校が十分に整えられていないので、牧会に対する学びの機会が少ないようである。そのため教会が大きな組織に依存する不安定さがあった。きちんとした牧会知識は教会員を育て上げるために欠かせられない。この日本人宣教師は、教会が独立して運営できるように、牧師のリーダーシップと教会員の一致を中心となるように働きかけた。現在はその教会は独立できている。

また、ナガランドの宣教師は、貧困からくる子どもたちの現状に立ち向かった。子どもたちに一番必要なものを応え、支えるということを具体的にを行った。それはただ子どもたちに物質的なものを与えて終わるのではなく、子どもたちを集めて共に住み、さらに御言葉をもって希望を与えるものであった。

その施設（アガペー・チルドレンズホーム）に住む 16 歳の少女がこれまでの話をしてくれた。彼女は父親を亡くし、母親が一人で 8 人の子どもたちを育てていた。父親が亡くなった時、生活の苦しさから彼女は望みがなくなり勉強を諦めようと思っていた。しかし、兄弟の誘いでこの施設にきて、神さまを知ることができた。先生方に励まされ、勉強をもう一度始められた。将来は翻訳家かツアーガイドになりたいと思う、ということであった。彼女の福音にふれ、苦しい現状が喜びへと変えられるという証は、この宣教師の働きが子どもたちにどれだけ影響を与えているかが分かる。



自分の証を喜んでしてくれた。

「私のお母さんが救われるように祈ってほしい」

両宣教師の働きは、現地の人々の置かれた状況に寄り添い、共に解決をしていくことであると知った。それは物資を運んで終わるようなことではない、心の繋がりを感ずることができた。

3、宣教のありかた

いろいろな宣教師の働きがある。それはそれぞれの目的によって、方法も変わってくるのである。現地にある連盟と自国の連盟との協力の下、行う宣教がある。現地の人々によってできた働きに、共に担うと言う形である。

また、単独でまだ福音が届いていない地方に出て行って教会を建てるということもある。自主的な働きのため、形にとらわれずに多くの事柄を成すことができる。

超教派の団体に所属して活動することもできる。その場合には、そこに所属しているあらゆる国の宣教師たちと協力しながら働きができる。また国内の動きや、宣教の方法について多くの情報を共有できる。

自分が行った先でどのような福音を語るのかによって、送り出される形がいろいろある。宣教の働きは多様であるが、欠かせられないことは母国への報告である。遣わされた者は、送り出している教会とよい関係を築いていく責任がある。そのことを通して、母国の教会の励ましとなり、それぞれの信仰を見つめなおすきっかけとなる。宣教師による報告を共有することで、送り出している教会もまた、間接的に宣教の働きを担っている。



超教派の宣教団体 OMF の事務所。カンボジアにいろいろな国から宣教師が来ている。

4、メンバーの一致

個人的な旅ではないので、メンバー間で感想を言い合う機会が多い。目的地までの移動の最中、夜に持たれる分かれ合いの時にも多くのことをそれぞれが話すことができた。それはこの旅での感想であったり、これまでの自分の経験であったり、今抱えている課題であったりする。日本を離れているからこ

そ、自分を客観的に見つめなおすことができた。旅で会う人からの刺激で多くの発見が与えられた。それらが感動となって言葉として現れた。

たった2週間であるが、日本にはこれほど深く話をする機会はめったにないだろう。非日常の環境だからこそ、語れることが多くあったと思わされる。それによって互いをより深く知ることができ、豊かな人間関係が育まれる。

5、福音理解の広がり

カンボジアの歴史と向き合う機会が与えられた。トゥールスレーンとキリング・フィールドという、ポルポト政権時代の虐殺に関する記念館を見学した。処刑に使われた高校には、捕虜の写真がずらりと並べられていた。記念の塔には、たくさんの頭がい骨が納められていた。カンボジアが抱えている「痛み」をみながら、なぜ「痛み」を表す必要があるのだろうかと思わされた。



キリング・フィールドの記念の塔。たくさんの頭がい骨が納められている。

旅の途中で、メンバーの一人が自分の抱えている課題を話してくれた。それは本人にとっては「痛み」の部分であった。それを聞いて他のメンバーからも自分の「痛み」の経験を語って

くれた。痛みとは隠したいもの、なかったことにしたいことである。なぜ痛みを覚えた自分の姿を示すことができるのか。それは「痛み」はただ弱さとしてあるのではなく、それを通して神さまが現れるためではないだろうか。「痛み」の分かち合いを通して、知ることができたのは以下の三つの点であった。

- 1、祈りに覚えるため
- 2、共に解決を見つけるため
- 3、痛みの中に神さまが表れるため

これからも「痛み」に向き合う中で、神さまの語りかけを聞いていければと思わされる。

6、再会

タイでは、以前行ったことのあるサマリアの家という子どもたちのための働きに行くことができた。前回は4年前でたった3日しかともにいなかったが、子どもたちは私を覚えていてくれた。私の顔を見て、思いだしてくれた子どもたちの顔に私はとてもうれしかった。子どもたちにとって、日本からきた私たちはただの訪問者ではなかった。むしろその訪問を喜び、ひと時の出会いを大切に思っていたことを感じる。



子どもたちは4年前に比べて顔つきがおとなになっていた。

私自身、今回のカンボジアやタイの子どもたちをしっかりと心に刻んでおきたいと思わされた。

7、祈り

滞在期間は短かったが、具体的な祈りの課題を知ることができた。そして、それを日本でより多くの人に報告し、祈りを共有したいと思う。日本の教会が外の教会に目をむく時、それが宣教師の方の支えになり、私たちは宣教の働きを担っていることになる。

おわりに

「打ち上げ花火にならないように」と、多くの短期滞在の日本人を受け入れてきた宣教師の言葉は、印象的であった。今までカンボジアに来た日本人が熱い思いを持って帰国しても、その思いが続かないことを知っていたのだと思う。このカンボジアとタイの宣教の現状をみて、私たちは多くのパッションを受けて日本に戻ってきた。しかし、それを時がたつにつれて消してしまっているのだろうか。

宣教師は「祈り続けることが大切である。」と教えてくださった。祈りの課題を持ってその国を覚えることである。さらには、自分には具体的にどのような働きがあるのかを祈り求めていくことも、宣教の一つの業であると思われる。簡単なようで、続けるのは難しい。しかし、それが旅で得たことが「打ち上げ花火」で終わらず持ち続けることができるのだと思わされる。